

【事例6】

(調査日：平成29年8月18日)

事例名	視覚障害者への音訳ボランティア
地域	市内全域
実施主体	佐倉市こおろぎの会（会長 立澤 洋子）
活動要約	視覚障害者への情報提供として録音物作り
主な分野	「視覚障害者支援」「情報保障」
主な関係者	ボランティア

■活動のきっかけ・経緯

○約44年前に、目の不自由な知人から広報などを読んでほしいと頼まれた方が、仲間を募り、勉強を重ねて会を立ち上げた。まだ“ボランティア”という言葉も一般的でなかった頃のこと。

○約10年前からデジタル化され、現在はパソコンに音声を取り込み、CDにコピーして利用者に郵送している。

○活動歴の長い会で、会員の入会のきっかけは様々だが、身近な視覚障害者の役に立ちたいなど、それぞれが使命感を持って参加している。

■活動内容

○現在25名の会員が5班に分かれて、こうほう佐倉、県民だよりなど5種類の広報紙を音訳し、CDにコピーして視覚障害者の方々に郵送している。

○広報紙の発行日に、担当班が紙面の割り振りを行い、各自が下調べなどの準備をする。翌日に録音をして、人数分のコピーを作り、郵便局に持参する。基本的に発行日の翌々日には利用者の手元に届く。

○広報類の他に、「月刊こおろぎ」という自主製作の音声雑誌を発行している。班ごとに、利用者に届けたい内容を選び、温かみのあるものに仕上げようと心掛けている。

○個人的なリクエストにより、家電の説明書なども音訳している。

■ポイント・工夫している点

○年度初めに年間録音予定表を作成、各自が仕事などの日程を調整して録音日を確保している。

○正確な情報を伝えるために、地名、人名、難読語などをよく下調べして、読み間違いのないように注意する。

○デジタル録音では、編集により頭出しができるので、目次を作り、聞きたい箇所が探せるように工夫している。「休日の急病は」などの緊急時に必要な情報は、最後にまとめて録音している。

○冒頭にテーマ曲や季節の挨拶を入れて、親しみやすいものになるよう工夫している。

■課題と今後の展開

○会を立ち上げ、当初から活動が続けている先輩がいて心強い反面、高齢や家族の事情などで、退会する会員もいるが、若い会員も少しずつ増えてきている。

○録音技術の進歩に遅れないよう、勉強会も必要である。

○こうほう佐倉など市が発行する広報類については、「声の広報等発行事業」として市から社会福祉協議会が受託している事業の中で、録音の部分を担当している。機材などは委託事業の中で準備されているものを使用している。

○日々、情報の取得が困難である視覚障害者の方々に、少しでも早く正確な情報をお届けできるよう日々努力している。

